

# 明治中期の前橋製糸業に関する 流通・生産統計

——「前橋市農工商定期報」を中心に——

井川克彦

## 一 はじめに

明治以降の群馬県製糸業については、石井寛治氏の長年の研究によって多くが解明されてきた。その研究蓄積は『群馬県史』の氏の執筆部分に集約されている<sup>1)</sup>。

群馬県製糸業は、明治期に輸出用の改良座繰（生）糸の生産・出荷で独特の位置を占め、西毛を中心とした南三社（碓氷社・甘楽社・下仁田社）と前橋製糸業に代表された。養蚕農民の製糸に基礎をおく前者に対し、後者は江戸期の前橋生糸市場圏の歴史を継ぐ町場の製糸業であった<sup>2)</sup>。前橋製糸業は、横浜開港後に国内絹織物産地向けの提糸（以下「提造」）の多くを輸出用に振り向け、明治10年頃から長野県諏訪地方を筆頭として器械製糸業が勃興した時、改良座繰糸の生産を選択した。すなわち、大枠に揚返する前の小枠糸を大量に集め、揚返場で大規模に揚返し、等級分けして大量斉一性のある生糸荷を作り、横浜に出荷した。この経営選択は、町場に密集して存在する「釜」(座繰糸設備と製糸人)と前橋の「市」(繭・生糸の流通機構)を最大限に活かすものであったと考えられる。

前橋製糸業の改良座繰糸生産の特徴は、小枠糸を生産する製糸家と、揚返・出荷を行う出荷団体が分化したことにある。出荷団体は、小枠買・釜掛（賃挽人に賃挽させる経営）・生糸買継を主とする商人系会社と、製糸家を加盟者とする結社の2タイプから成った<sup>3)</sup>。商人系会社は明治30年代に閉業したが、多くの結社を吸収していった交水社は生き残り、30年代以降に本格化する器械製糸業の担い手として再び発展していった。

このような歴史を受け、これまでの前橋製糸業史研究も出荷団体を中心になされてきた。前橋製糸業の実体をなす製糸人・生産組織の実態解明は難しい。製糸人は3千人以上に及び、明治30年代までそのほとんどは1～9釜未満の作業場の雇人・賃挽人であったからである。しかし、出荷団体を中心にする傾向を助長してきた研究上の理由もあるように思われる。前橋製糸業に関する統計に不規則な数値が多くあり、それが統計の利用を抑制してきたと推測される。

以下、本稿では、前橋製糸業に関する基礎的な諸統計を吟味する。統計数値はその対象の全体に関わるものであり、出荷団体中心の研究が見逃しがちであった論点を浮かび上がらせるであろう。なお、以下の諸表では、比較の便宜のため、必要に応じ換算して生糸量の単位を個に統一し（1個＝9貫、100斤＝16貫）、年号は和暦で表示する。

第1表 群馬県生糸横浜入荷量と大荷主出荷量 (M20～T1)

単位 個

年	横浜入荷量		生糸出荷量				G=A-F:残余	H:交水社生糸出荷量	I:長野県生糸横浜入荷量
	A:合計	B:うち改良座繰糸	C:碓氷社	D:甘楽社	E:下仁田社	F:3社計			
M20			1,038	1,863	0	2,901		457	
M21	15,536		1,358	1,673		3,031	12,505	896	16,833
M22	14,081		1,229	1,495		2,724	11,357	715	18,572
M23	9,773		1,307	1,493		2,800	6,973	604	18,916
M24	14,580	12,633	1,731	1,993		3,724	10,856	1,078	24,268
M25	13,118	11,706	1,754	1,949		3,703	9,415	1,761	24,142
M26	12,326	11,446	1,913	1,274	821	4,008	8,318	1,849	26,314
M27	13,192	12,047	2,342	1,828	801	4,971	8,221	1,836	32,712
M28			3,075	2,352	1,098	6,525		2,097	
M29	9,270	7,722	2,357	1,712	766	4,835	4,435	1,083	27,854
M30	13,874	12,327	3,445	2,773	1,243	7,461	6,413	2,308	31,670
M31	12,798	11,321	2,999	2,978	1,069	7,046	5,752	1,790	30,205
M32	14,861	12,604	4,034	3,832	1,279	9,145	5,716	1,836	34,529
M33	14,219	12,653	4,770	4,677	1,309	10,756	3,463	1,601	35,961
M34	17,152	14,958	5,227	5,191	1,764	12,182	4,970	2,253	46,614
M35	16,958	14,814	5,569	4,807	1,925	12,301	4,657	1,890	42,972
M36	16,806	14,849	6,560	4,851	2,162	13,573	3,233	1,875	46,512
M37	19,051	17,206	7,380	5,445	2,547	15,372	3,679	2,435	48,519
M38	17,495	15,249	6,284	4,404	2,141	12,829	4,666	1,581	49,260
M39	17,658	15,189	6,478	4,428	2,673	13,579	4,079	1,948	61,057
M40	19,511	16,569	7,624	4,904	3,135	15,663	3,848	2,392	68,087
M41	22,416	19,397	8,706	6,086	2,688	17,480	4,936	2,785	76,466
M42	26,434	21,968	9,803	8,635	3,836	22,274	4,160		82,983
M43	23,562	18,273	8,829	7,024	2,687	18,540	5,022		92,994
M44	22,271	15,803	7,317	5,805	2,582	15,704	6,567		103,893
T1	23,273	11,723	8,094	6,080	2,457	16,631	6,642		124,510
T2	27,168	9,673	7,894	5,831	2,438	16,163	11,005		140,950
T3	28,662	7,877	7,617	5,619	2,070	15,306	13,356	4,143	126,139

資料・注) Mは明治、Tは大正(以下の表でも同じ)。

A, B, I:『横浜生糸貿易十二年間概況』(原商店、1896刊)、『横浜生糸貿易概況』(M29～T3版、原商店)(以上『横浜市史』資料編8～10、12、横浜市、1970～1974、所収)。

M33以降の版では、M32のAは15407.5個となっている。

T2のBはミスプリントなので合計と器械糸などの数値より算出。

DのうちM24～27のみ『蚕糸貿易要覧』(茂木商店編、M25～28刊)による年度(4月～翌年3月)の値。

C, D, E, H:『横浜市史』第4巻上(横浜市、1965)88頁。

## 二 流通統計

### 1 横浜生糸入荷量と南三社出荷量

まず初めに、群馬県生糸の横浜入荷量と南三社・交水社の生糸出荷量を記した第1表を概観する。残念ながら生糸売込商による横浜側からの報告では横浜入荷量は群馬県単位の数値しかない。しかし、南三社のお荷量が横浜お荷量にほぼ等しいとすれば、群馬県生糸横浜お荷量Aから南三社お荷量Fを引いた「残余」Gのかなり大きな部分が前橋から横浜へのお荷量である筈である。明治30年頃からの南三社のお荷量は群馬県以外で生産された生糸を含むが<sup>4)</sup>、これらも南三社のそれぞれの名で横浜にお荷されたとすれば、「残余」の意味は変わらない。

この表によれば、群馬県生糸の横浜お荷量は20年代に停滞し、30年代後半に増大して40年代に20万個台になっている。30年代末までそのほとんどは改良座繰糸であるが、40年代には器械糸の増加が顕著となる。明治期全体としては長野県生糸の横浜お荷量の急増と著しい対象をなす。南三社の横浜お荷量も、20年代末に群馬県お荷量の半分を超えた後、増加のテンポが鈍る。「残余」Gは、20年代に半減して30年代半ばまで減少するが、「残余」にしめる前橋の交水社生糸お荷量Jの割合は36年に半分を超えている。

第1表であらためて確認すべきは、21～36年における群馬県生糸横浜お荷量の停滞と、その中における南三社の生産⇨お荷量の増大である。この南三社の生産量の増加は、主として、碓氷・北甘楽郡から出発した三社が群馬・多野郡などへ、さらに県外へと組織範囲を拡大したことにより、各地域の生産量の増加を意味しない<sup>5)</sup>。

なお、「座繰」という語は明治前中期には改良座繰(「座繰捻造」)の意味で多用されている。第1表のAは37年まで「座繰捻造」=改良座繰糸で、38年以降は「座繰」=改良座繰糸とそれ以外の従来糸(非器械糸)であり、Dは資料では「座繰」だが改良座繰糸である。以下では、引用文を除き、後者の非器械糸の意味で「座繰」という語を使う。

### 2 「移出入表」

明治25～34年については「前橋市農工商定期報」<sup>6)</sup>(以下「定期報」と略記)に、県内県外各地から前橋市にお荷された生糸と、前橋市から県内県外各地へお荷された生糸の数量とコメントを付した「蚕糸類集散景況」という報告がある。この2つの量を以下では移入量・移出量と呼び、この報告による統計を「移出入表」と呼ぶことにする<sup>7)</sup>。「定期報」は経済関係の統計や景況を前橋市が県に報告した文書の控を綴ったものであり、25～36年分が8冊に仕立てて保存されている。お荷量は県内外の「仕出元別」の、お荷量は横浜を含む県内外の「仕向先別」の生糸種類別の数値と合計が記されている(価額は不記)。すでに『前橋市史』で表として掲載され、『群馬県史』でも利用されているが<sup>8)</sup>、表の作り方と数値に疑問を抱いたので、原資料にあたって付表1・2を作り、さらにこの付表を加工して以下の諸表とした。ただし24年上半期の数値を欠き、また25年上半期の移入量は記載が不備なので数値が得られない。

「移出入表」による生糸種類と移出先・移入元の組み合わせは多い。以下、この統計値を加工して検討するが、全体を概観することに重きをおく。

第2表 前橋市の生糸移出入量 (M24~34)

単位 個

年	移 出				移 入			純移出=移出-移入			
	器械	改良座繰	提糸・折返	合計	改良座繰	提糸・折返	合計	器械	改良座繰	提糸・折返	合計
M24下	60	5,008	6,147	11,215	420	1,126	1,546	60	4,588	5,021	9,669
M25下	225	6,963	1,570	8,758	172	1,115	1,287	225	6,791	455	7,471
M25	238	7,965	1,963	10,166	?	0	?	?	?	?	?
M26	388	7,395	3,215	10,998	970	1,365	2,335	388	6,425	1,850	8,663
M27	330	*7,795	2,588	*10,713	40	2,594	2,634	330	*7,755	-6	8,079
M28	480	*9,085	3,989	*13,554	0	3,313	3,313	480	*9,085	676	10,241
M29	560	3,622	4,114	8,296	0	3,550	3,550	560	3,622	564	4,746
M30	519	4,671	5,831	11,021	0	4,842	4,842	519	4,671	989	6,179
M31	140	4,282	6,021	10,443	0	4,774	4,774	140	4,282	1,247	5,669
M32	210	5,244	7,480	12,934	0	5,472	5,472	210	5,244	2,008	7,462
M33	53	2,690	6,625	9,368	0	5,869	5,869	53	2,690	756	3,499
M34	0	3,470	7,173	10,643	0	6,294	6,294	0	3,470	879	4,349

資料) 付表1・2。

注) 「提糸・折返」は「生糸」を含む。「生糸」はM27出荷240、M28出荷380のみ、入荷はなし。

第2表は、種類別の移出量・移入量と、移出量から移入量を差し引いた純移出量を示す。本稿においてこの表が持つ最大の意味は、論理的には純移出量が生産量にほぼ等しいということにある。というのも、前橋市内では生糸を原料として消費する絹織物業の生産額が生糸生産額に対して無視し得るほど小さかったからである<sup>9)</sup>。ただし、移出・移入量と生産量とは時間的ズレを持ち得る。また移出・移入量に洩れがあれば、当然その分だけ純移出量と生産量は一致しない。24・25年の純移出量は下半期分しか判明しないが、当時の下半期の純移出量は1年分の大半を占めると推測できる<sup>10)</sup>。また、27年と28年の「改良座繰」の出荷量については、大幅な修正を加えている(付表1注参照)。

この表によれば、「純移出」の「合計」は29年以降減少し、(前橋生糸の)「開港以来未曾有ノ盛況」(後述)と報告された32年を除き、34年まで停滞的である。種類別に見ると、「改良座繰」の減少がその主因である。「提造」と「折返造」の関係については、後で検討するが、両者合計では24年下期を除き純移出量は「改良座繰」よりずっと小さい。

### 三 生産統計

#### 1 「県統計」と「勸業年報」

さて、前橋市(町)の明治20~大正1年の生糸生産量の統計を確認しよう(第3表)。『群馬県統計書』(以下「県統計」)は明治34年まで養蚕に関する表の中に「生糸」の生産量を記すのみで種類別を記さない。いっぽう20~36年の『群馬県勸業年報』(以下「勸業年報」)は生糸種類別の生産量を記し、20~22年は「器械」「座繰」「提造」の3種、33~37年は「器械」「座繰捻造」「座繰提造」「座繰折返造」ほか第3表の注に記したような種類別を記す。18~22年分については『群馬県臨時農事調』(以下「農事調」)が「器械」「座繰」の2種に分けて記しているが<sup>11)</sup>、この「座繰」は「座繰捻造」(=改良座繰)のほか提造などを含む非器械糸を意味すると判断できる。

注目すべきは、35~36年において、「県統計」の各種別の合計と「勸業年報」のそれが等しく、

第3表 前橋地域の生糸生産量 (M20～T1)

①東群馬郡

単位 個

年	勸業年報				県統計	農事調		
	器械	座繰	提造	合計	生糸	器械	座繰	合計
M20	32	1,683	302	2,017	2,029	262	4,762	5,024
M21	6	836	1,351	2,193	1,859	320	4,034	4,354
M22	374	3,182	811	4,367	4,367	374	3,966	4,340

②M23～24:東群馬郡、M25～28:上段は前橋市、中段は東群馬郡、  
下段は合計、M29～37:前橋市

単位 個

年	勸業年報 (M37年は県統計)				県統計		
	器械捻造	座繰捻造	提造・折返造・島田造	合計	器械	座繰	生糸(合計)
M23	306	2,831	771	3,908			3,908
M24	60	4,985	5,698	10,743			10,743
M25	185	4,907	1,570	6,662			6,662
	-	16	115	119			119
M26	185	4,923	1,685	6,781			6,781
	191	4,639	1,416	6,246			6,246
	-	11	95	105			105
M27	191	4,649	1,510	6,351			6,351
	2,362	2,993	1,178	6,534			6,534
M28	-	11	105	115			115
	2,362	3,004	1,282	6,649			6,649
	2,362	3,138	1,181	6,681			6,681
M29	-	11	100	111			111
	2,362	3,148	1,281	6,792			6,792
M30	2,334	3,113	1,165	6,611			6,611
M31	2,693	3,982	1,331	8,006			8,006
M32	2,455	3,110	1,412	6,977			6,977
M33	173	6,933	3,023	10,129			10,129
M34	*548	5,597	2,118	*8,263			8,263
M35	-	6,039	1,560	7,600			7,600
M36	32	5,074	1,344	6,450	32	6,418	6,450
M37	84	3,170	1,054	4,307	84	4,224	4,307
M38	87	3,278	-	3,365	87	3,278	3,365

③前橋市

単位 個

年	県統計		
	器械	座繰	合計
M38	59.6	2,095	2,155
M39	110	2,289	2,399
M40	1,264	1,020	2,284
M41	1,480	992	2,472
M42	2,807	1,606	4,413
M43	2,824	1,368	4,192
M44	3,499	527	4,025
T1	4,067	352	4,419

資料)「勸業年報」、「県統計」、「農事調」。

注) 原資料の貫単位を個単位に換算した (1個=9貫)。

②では「提造」「折返造」「島田造」をまとめた。内訳は第5表参照。

\*の値は誤りだが原資料の数値を個換算した (本文参照)。

M23以降の「勸業年報」の種類別記載は以下の通り。

M23～24:器械捻造、座繰捻造、折返造、提造、島田造、鉄砲造、玉糸、其他、計。

M25～27:器械捻造、座繰捻造、折返造、提造、島田造、鉄砲造、其他、計。

M28～32:器械取、坐繰 (捻造、折返造、提造、島田造、其他) 合計。

M33～36:器械取、坐繰 (捻造、折返造、提造、島田造、鉄砲造、其他) 合計。

東群馬郡・前橋市の鉄砲造・其他はすべての年でゼロ。表の「合計」は「玉糸」を含まない。



第4表 前橋市の「製糸工場」

	調査回数 /製糸場名	場数	釜数	1ヶ年生 糸生産量	釜当り生 産量
器械之部	第1次 (M26) うち交水社	15	釜 284 60	個 252 55	貫 8.0 8.3
	第2次 (M29) うち交水社	27	492 60	515 52	9.4 7.8
	第3次 (M33) うち交水社	31	581 56	1,152 111	17.9 17.9
	第4次 (M38) うち交水社	28	647 98	686 84	9.5 7.7
	第1次 (M26)	45	759	347	4.1
	第2次 (M29) うち昇立社 天原社 勝山善三郎 その他	30	2,065 750 500 500 315	1,653 709 528 133 282	7.2 8.5 9.5 2.4 8.1
	第3次 (M33) うち昇立社 天原社 勝山善三郎 その他	45	1,281 450 150 150 531	1,708 600 200 198 710	12.0 12.0 12.0 11.9 12.0
	第4次 (M38) うち昇立社 天原社 その他	5 3	1,375 550 740 85	583 181 319 83	3.8 3.0 3.9 8.8

資料)「全国製糸工場調査表」。

注)第4次の生糸生産量は明治37年6月～38年5月の数字。  
生産量は原資料の斤表示を貫・個に換算した。

また、「県統計」の「座繰」の数値が、「勸業年報」の「座繰捻造」・「同折返造」・「同提造」・「同島田造」・「同鉄砲造」・「其他」の合計値に等しいことである。38年以降の「県統計」は「器械」「座繰」の2つの内訳しか記さないが。この「座繰」は37年に続いて改良座繰糸を含む非器械糸の総称であると判断できる<sup>12)</sup>。

第3表の数値を確認しよう。20～21年については「勸業年報」と「県統計」の数値が「農事調」の半分ないしそれ以下だが、これについては23年との連続性がある「農事調」の数値を取るべきであろう。22年以降、「県統計」の「生糸」の数値は「勸業年報」の合計の数値に一致している。最大の問題は、27～31年の「器械捻造」の数値がその前後に比べて格段に大きく、「座繰捻造」が小さいことである。35年以降の改良座繰糸生産の縮小は、既成研究が明らかにした商人系会社の閉業や内国向け出荷の増加から説明可能だが、この27～31年の「器械捻造」「改良座繰」の数値をどのように理解すべきであろうか。

27～31年の「器械捻造」の数値がいわゆる器械糸（器械製糸場で生産した生糸）の生産量でないことは、「全国製糸工場調査表」<sup>13)</sup>の数字（第4表）から明白である。したがって、第3表の27～31年の数値について次の2つの可能性がある。

- ・数値を1ケタ多く間違えるなどして「器械捻造」の数値が過大であるが、「座繰捻造」は改良座繰糸の数値として妥当である場合。この場合には、各種類の「合計」も「器械捻造」が過大な分だけ過大な筈である。
- ・器械糸と改良座繰糸からなる捻造糸生産量が、何らかの区分法で「器械捻造」と「座繰捻造」に分けられている場合。この場合には、「合計」は前橋市生産生糸の合計である筈である。

27～31年の「器械捻造」の数値は約20千貫と大きく、このどちらであるかは、前橋の生糸生産量の推移の把握に大きく関わる。また第3表ではまとめたが、「提造」「折返造」などの従来糸の数値の変動も著しい（後掲第5表）。以下、「勸業年報」のもととなった資料を検討しよう。

## 2「生糸産額表」

「定期報」には「前橋市生糸産額表」(以下「生糸産額表」と略記)という毎年の報告の控も綴られている。その数値は明治25～36年の「勸業年報」の数値に一致していて、「勸業年報」のもとになった報告と思われる<sup>14)</sup>。「生糸産額表」の数値を第5表にまとめた。「生糸産額表」の各年の生産量は、表の各年の上段・中段に示したように、27年までは「各社組」と「一己人」の2群に、28年以降は「製造所」と「自宅」の2群に分けられ、さらに各群が生糸種類別に分けられている。「勸業年報」は明治27年版を除いてこの2群に分けた数値を記していない<sup>15)</sup>。

第5表の群別の数値について、次の点が注目される。

- ①24～26年。「器械捻造」「座繰捻造」については、上段の「各社組」が圧倒的で、中段の「一己人」は小さい。逆に「提造」は「一己人」のみである。
- ②27～31年。27年に「各社組」の「器械捻造」が突然に2,177個増え、上段の「各社組」の「座繰捻造」が1,153個減っている。次いで28年に、「各社組」が「製造所」という表現に、中段の「一己人」が「自宅」という表現に変わる。この28年の「製造所」「自宅」別の「器械捻造」「座繰捻造」の数値は前年の「各社組」「自宅」別の数値とほとんど同じである。以後31年まで上段の「製造所」の「器械捻造」「座繰捻造」の値は、30年を除きあまり変わらない。
- ③32～36年。32年に「製造所」の「器械捻造」が2,256個減り、「自宅」の「座繰捻造」が3,827個増える。34年以降はこの「自宅」の「座繰捻造」が急減するが、「製造所」の「座繰捻造」は34年まで増え、その後減る。

このように激しく変わる数値は何を意味しているのだろうか。以下、検討したい。

### 3「生糸産額表」のコメント

「生糸産額表」に付されているコメントを確認しながら、その数値を確認しよう。以下に引用するコメントの文中の「坐繰」は改良座繰の意味である。(以下の引用では、片仮名を平仮名に改め、句読点・下線を付し、漢数字を適宜洋数字に置き換え、また生糸量の貫単位表を個単位に換算した。〔 〕で意味を補った)

#### ①明治24～26年

〔24年〕…前年表に対照すれば、器械捻造を除くのは皆非常の増加を為せり。之れ製糸の業年一年に進歩すると、又糸況の宜きとに依れるものならん欵(年月日不記)

〔25年〕前年に対照し産額の減少せしは桐花組外四社の廃業せしに原因せり<sup>16)</sup>。然りと雖も此数量を現在の各社に対照し其斤量の多きは、客年〔25年〕糸況の活発なるか為めなり。又提糸の減少せしは外国輸出の坐繰生糸の製造頻繁なりし為め、従て提糸の減少せしならん乎(年月日不記)

〔26年〕前年に比べて「器械捻造」「座繰捻造」では「各社組」が241個増え、

第5表 「定期報」の生糸生産量 (M24～36)

各年につき上段は各社組/製造所、中段は一己人/自宅、下段は合計。

年	単位 個					
	器械捻造	座繰捻造	提造	折返造	島田造	合計
M24	60	3,974	0	0	0	4,034
	0	994	5,591	0	0	6,585
	60	4,968	5,591	0	0	10,619
M25	165	3,764	0	0	0	3,929
	20	1,142	1,570	0	0	2,732
	185	4,907	1,570	0	0	6,662
M26	158	4,013	0	0	0	4,171
	34	626	1,416	0	0	2,075
	191	4,639	1,416	0	0	6,246 a
M27	2,335	2,860	0	0	0	5,195
	28	133	850	0	328	1,339
	2,362	2,993	850	0	328	6,534
M28	2,335	2,860	0	0	0	5,195
	28	278	853	0	328	1,487
	2,362	3,138	853	0	328	6,681
M29	2,310	2,802	0	0	0	5,112
	24	311	850	0	315	1,500 b
	2,334	3,113	850	0	315	6,611
M30	2,655	3,565	0	0	0	6,220
	38	417	988	0	343	1,786
	2,693	3,982	988	0	343	8,006 c
M31	2,429	2,777	0	0	0	5,207
	25	333	954	0	458	1,771
	2,455	3,110	954	0	458	6,977
M32	173	2,773	0	0	0	2,946
	0	4,160	2,418	605	0	7,183
	173	6,933	2,418	605	0	10,129
M33	55	2,686	0	0	0	2,741
	0	2,911	1,694	423	0	5,029
	55	5,597	1,694	423	0	7,770
M34	0	3,717	0	0	0	3,717
	0	2,322	0	315	1,245	3,883
	0	6,039	0	315	1,245	7,600
M35	32	3,246	0	0	0	3,279
	0	1,827	1,075	269	0	3,171
	32	5,074	1,075	269	0	6,450
M36	84	2,131	0	0	0	2,214
	0	1,039	886	168	0	2,093
	84	3,170	886	168	0	4,307

資料)「定期報」。

注)「鉄砲造」「其他」はどの年も数値不記。

上段はM27まで「各社組」、M28以後は「製造所」、中段はM27まで「一己人」、M28以後は「自宅」。

a,b,c: 合計を計算して訂正、原数値を換算すると a=6,246 個、b=2,055 個、c=8,340 個。

\*は原資料では「製造所」の「器械捻造」を492.9貫と記し、これを4.929貫として「製造所」合計を29,103貫と記している。合計が誤りと判断して「製造所」合計を24,666.9貫に訂正し個換算した。

「一己人」が503個減り、「一己人」の「提造」が154個減り、「惣産額」が416個減った。] 此原因は、同年5月非常霜害の為め繭の産額大に減少し、加ふるに生糸の価格春季高貴なりしも漸次低落して製糸の期節6、7月に至り殆と100斤7、80円の下落となり、随て製糸家は其数を減し、一己人製造者中に於ても各社組に枠売するもの多く、為めに提糸并坐繰製糸の数を減し、各社組は却つて坐繰製の増額を見ると雖も、前条の理由に依り総産額には多数の減少を來たせり (M27.7.11)

24年についてのコメントと第5表の数値によれば、24年の「座繰捻造」(2群計) 4,968個と「合計」(同) 10,619個はピークをなしていた。第3表には省いたが、「農事調」によれば、18～23年の前橋町を含む東群馬郡の生糸生産量(「生糸」座繰合計)のピークは19年の5,354個(48,189貫)である。26年については、繭高・糸廉の商況において、「一己人」において提造・改良座繰糸生産をやめて小枠売するものが多かったため、第5表の数値通りに、「一己人」の「提造」と改良座繰が25年より減り、「各社組」の改良座繰が増えたという。提造をやめて小枠売する動きは25年のコメントにもある。このように、「一己人」は提造生産するか、小枠売するかの選択を行う存在であった。大量斉一性のない提造は横浜には売れなかったが、前橋の市では売ることが可能であったと思われる。

第5表の25～26年の「器械捻造」は小さく、2群合計で192個(26年)という数値は、「全国製糸工場調査」第1次(26年)の「器械之部」前橋市の252個(第4表)より小さい、「生糸産額表」の24～26年の「器械捻造」は厳しく区分した器械糸と見られ、「座繰捻造」の数値は、若干の器械糸を含むが、ほぼ改良座繰糸全体の数値と見ていだろう。

## ②明治27～31年

[27年] 前年に対照し産額の増加したるは、2、3月中価格騰貴したると、新糸の季節価格は低落せしと雖も商家切りに売抜に偏し、且つ晩歳又騰貴したるより本年は盛況を以て終れり。而して一己人の製造額著しく減少し各社組の増加を見るは、多くは一己人提糸の低価なるを製造せんより各社組へ枠売するの利なるを以て此増減を來せし所謂「所以カ」なり (M28.6.6)。

糸高で「一己人」の「提造」が減り、小枠買を経た「各社組」の生産が増えたというが、第5表では、前述のように、27年には「各社組」の「器械捻造」が大幅に増え、「各社組」の「座繰捻造」が大幅に減り、この2つの合計が増えている。「各社組」の「提造」「折返造」「島田造」はいずれもゼロで、前年より増えているのは「各社組」の「器械捻造」だけである。「[小] 枠売」された生糸で仕立てられたのは改良座繰糸の筈だから、この記述から27年の「各社組」の「器械捻造」が多くの改良座繰を含むことは確実である。

26年から27年にかけての数値の変化は、コメントの指摘するような動きに、27年になされた「器械座繰」と「座繰捻造」の区分法の変更による影響が加わった結果であろう。したがって、旧区分と新区分の方法如

第1図 区分法の変化

各社組の生産量(単位千個)					
	M26		⇒	M27	
	「器械捻造」	「坐繰捻造」		「器械捻造」	「坐繰捻造」
小枠買による生産	0.0	2.0		0.0	2.9
小枠買以外生産	0.2	2.0		2.3	0.0
合計	0.2	4.0		2.3	2.9

「合計」は第5表の「各社組」の数値の概数。  
M26には「小枠買以外生産」の一部を「器械捻造」に区分し、M27には「小枠買以外生産」の全部を「器械捻造」に区分した、と仮定した場合の数値例。



何によっては、新区分による「各社組」の「器械捻造」が、増加した小粋買から生産された改良座繰糸を含むとは限らない（第1図参照）。

続く28～31年には「各社組」が「製造所」に、「一己人」が「自宅」に名前が変わっているが、28年の「製造所」の「器械捻造」「座繰捻造」の数値は27年のそれと全く同じであり、区分法は同じであろう。28年について、「生糸産額表」の数値と新聞記事集計による横浜販売量（第6表）と比較しよう。「取引結果」の記事を集計した横浜販売量は前橋糸合計で5,839個で、第5表の28年の「器械捻造」「座繰捻造」合計（2群計）5,500個よりやや大きい程度である。したがって、数値的にも、改良座繰糸の生産量が「各社組」と「一己人」の2群の「器械捻造」と「座繰捻造」に分かれて記されていると推測できる。28～31年分のコメントは、養蚕の豊作不作による繭価の高低と、横浜市場の好不況・糸価高低を、生産量全体の増減に結び付けて説明するだけで、生糸種類および「製造所」「自宅」に関する記述がなく、疑問点の解明に示唆を与える記述は見当たらない。いちおう要約しておけば、以下の通りだったようである（第1表参照）。

〔28年〕養蚕豊作・繭安・糸高で「稍や産額増加」(M29.4.17)、

〔29年〕養蚕不作・繭高・糸安で「産額減少」「製糸家は…往々損害を蒙り半途にて廃業せんもの多かりし」(M31.2.8)

〔30年〕横浜市場活発・「製糸家は幾分利益あり」「産額ノ増加」(M31.3.15)

〔31年〕養蚕「甚た不良」「横浜商況不活発」で「成行に任せて製糸をなす製糸家多かりし」で「産額減少」(M32.3.3)

### ③明治32～36年

32年にまた区分法が変わったと推測され、第5表では、上段の「製造所」の「器械捻造」が激減し、中段の「自宅」の「座繰捻造」が激増している。まず、生産量の総計において24年に次ぐピークを示す32年について、コメントを確認しよう。

〔32年〕…本年養蚕豊饒なると生糸の商況は内外の需要最も盛にして、横浜開港以来未曾有の盛況を呈せしを以て其産額を増加したり（M33.3.7）

次に33～36年について、まず「器械捻造」に関する記述を見る。

〔33年〕表中器械捻造は本市輸出用生糸中優等なるものなれども、明治33年中1回横浜にて取引せし耳〔のみ〕なれば、価格を見るに甚た困難なり。故に他市又は他社に比較し価格を定めたり（M34.2.7）

〔34年〕表中器械捻造は前年迄本市の製造は交水社にて産出せるものを起算せしが、該社も本年より坐繰上物と混入し坐繰マークに合併せしが故に価格を見るに困難なるがため表中よ

第6表 群馬県生糸横浜販売個数 (M28) 単位 個

生糸荷名	取引結果	売込手合
	個	個
碓氷社	1,671.5	1,829.5
甘楽社	862.0	1,025.5
下仁田社	501.0	573.0
小計	3,034.5	3,428.0
天原社	710.5	873.0
昇立社	597.0	612.0
市村社	318.0	515.0
勝山	301.5	377.0
小計	1,927.0	2,377.0
交水社	1,618.0	1,776.0
桐華社	1,526.0	1,700.0
蓬萊社	599.0	812.5
その他前橋	169.0	299.0
小計	3,912.0	4,587.5
前橋計	5,839.0	6,964.5
その他	1,033.0	1,434.5
メ	9,906.5	11,827.0

資料・注)「時事新報」M28分の「横浜生糸商況」記事中心「売込手合」「取引結果」の群馬県生糸分を集計。以下数字は「取引結果」個数。  
 その他前橋:申田63/奥平31/三英社53/日新社14/岩崎8/前橋福口高商会0。  
 その他:旭社206/榎か組130/群馬社110/昇明社161/緑精社73/麗水社71/木村57/吾妻社42/高橋33/愛精社30/開運社29/ほか91。

り除きたり。然れとも製糸高は83個にして貫匁は784貫350匁なり。価格は普通坐繰より大凡20枚乃至25高にて、先年中売行ありたり（M35.3.8）。

34年には、生産生糸の価額を記するのが困難なため交水社の「器械捻造」生産量ではなくゼロと記したという。「生糸産額表」は、33年分から貫目とともに価額を記しているが<sup>17)</sup>、この価額の算定が困難なため、交水社の器械糸が83個あったにもかかわらずゼロにしたというのである。このコメントから、32～34年には原則として交水社が生産した器械糸の量を「器械捻造」としたと判断でき、第4表の「器械之部」の交水社の生産量とも見合う。ただし、同表の第3次（33年）「器械之部」の交水社の生産量111個（1釜当たり17.9貫）は、過大な数値と思われる<sup>18)</sup>。

〔35年〕表中器械捻造は10或ひは12「デニエー」の細糸にして産出高甚た僅少なり（M36.3.21）

〔36年〕表中器械と称するは器械の「テッレードマアーク」（トレードマーカー引用者注）を付するものにして…（M37.5.9）

32年以降、「器械捻造」は「製造所」の群にのみに記され、その数値は35年32個、36年84個と小さい。この84個（原資料753貫）は、「全国製糸工場調査表」第4次による37年度の「器械之部」前橋市合計686個（6,178貫）のうちの交水社の分84個（759貫）と等しい（第4表）。やはり「生糸産額表」は交水社の器械糸を「器械捻造」の数値としたのであろう。

次に「座繰捻造」に関するコメントであるが、いずれも前述の「器械捻造」についての記述に続くものである。

〔33年〕…器械捻造は…価格を見るに甚た困難なり…。〔座繰〕捻造りも然り。本市に於ては交水社の外、勝山社1回取引あるのみ、天原社・昇立社等亦1回の取引をなす。故に他社又は他糸を標準として算出せり。而かして前年に対照し正反対の商況にして実に製糸業界の一大凶年なりしを以て、亦産額も平年に比し非常の減額なり（M34.2.7）

〔34年〕坐繰捻造は34年取引回数は61回にして交水・天原・勝山の3社とし、何れも本部より末物多きが故に価格も安価に見つつあれとも、實際を確調せしものなり。輸出高は坐繰捻造は前年に比し意外の多額なれとも他は前年の7分に当れり（M35.3.8）

33年について、勝山社・天原社・昇立社が取引1回のみというのは、横浜取引の事だろう。横浜取引であればその1回分の価格は分かる筈であり、文意は、これらの会社の生産した生糸のうち横浜取引されなかった生糸の価格が分からないということだろう。そうだとすると、「生糸産額表」は正当にも横浜販売量と生産量を区別していることになる。それらの生糸は横浜以外に売られたのか、あるいは来年の横浜販売に回ったのだろうか。また、34年についてのコメントに「他は…7分に当れり」とある従来糸についての記述については後述する。

〔35年〕坐繰捻造は35年中取引回数78回にして、交水・天原・昇立・勝山の4社とし、売行き割合に末物多かりしは養蚕の不況なりし結果にして、生糸坐繰も依托品例年より検査上地売の多く出てしを以て、価格も売行きに対する比較に於ては平均は目弱なり（M36.3.31）

〔36年〕表中器械と称するは器械の「テッレードマアーク」を付するものにして、坐繰捻造も同断なりとし、春蚕は不良なりしを以て生糸の出来高少額なるも、夏秋蚕良好なりしを以て前年度に比し秋秋マ蚕の製糸多数なりし。而して売行も頗る円満なりしと雖も原料の格高なりし為め産額の減少は著しかりしものとす（M37.5.9）

35年の横浜生糸取引量は、新聞記事集計による第7表によれば、天原社・昇立社・勝山と交水

社の合計は2,843個で、各社の取引結果が記されているのべ日数は72日となる。『群馬県蚕糸業現況調査書』(以下「現況調査」)の数字を35年のものと見れば、その前橋市生産量は「座繰製糸」7,545個(67,906貫)で<sup>19)</sup>、第5表の「生糸産額表」の35年の「座繰捻造」の2群計5,074個より大きく、その「製造所」分3,246個は第7表の「前橋計」2,868個に近い。したがって、32～36年の「生糸産額表」の「座繰捻造」は、少量の器械糸を含むが、ほぼ改良座繰糸の全体が「製造所」と「自宅」の2群に分けて記されていると判断できる。

32～36年に関するコメントからは、「製造所」と「自宅」が何を意味するかについてのヒントは得られない。「製造所」と「自宅」の区分は、何を意味するのであろうか。また、「提造」「折返造」「島田造」に関する「生糸産額表」のコメントにも注目すべきものがある。さらに、「移出入表」と「生糸産額表」を対比しながら考察することにする。

#### 四 「移出入表」と「生糸産額表」

##### 1 改良座繰糸

第8表は、「移出入表」と「生糸産額表」の改良座繰糸に関する数値を並べたものである。移出先・移入元はまとめたが、「国内向」Bは桐生・足利・大間々・伊勢崎など、「国内から」Dは高崎・吾妻などで量は小さく明治28年以降はゼロである。25～28年において移出量合計C≒純移出量はほとんどが改良座繰糸である。生産量合計Hに比べてかなり大きく、29年以降は逆にかなり小さい。

25～28年までのC>Hは、「移出入表」のCには含まれていないところの、商人系会社などによる買継が盛んだったためであろう。もしそれらが市外の商人・生産者から横浜市場や前橋の市を介さずに購入して販売するものだったと

第7表 群馬県生糸横浜販売個数 (M35)

生糸荷名	取引結果	単位 個	
		うち器械系	個
碓氷社	4,795.0		79.0
甘楽社	3,508.0		0.0
下仁田社	1,705.0		34.0
小計	10,008.0		113.0
天原社	574.0		36.0
昇立社	202.0		0.0
勝山	150.0		0.0
小計	926.0		36.0
交水社	1,917.0		0.0
新盛館	24.5		24.5
小計	1,941.5		24.5
前橋計	2,867.5		60.5
その他	814.5		442.5
県合計	13,690.0		616.0

資料・注)『時事新報』M35の「生糸取引結果」記事  
 中の上州分を集計。  
 「その他」の内訳(合計個数、括弧はそのうち器械個数)  
 旭社173 (158) / 麗水社112 (112) / 富岡78 (0) /  
 群馬社74 (0) / 群馬優等・同並等57 (0) / 信達館  
 57 (57) / 尾島46 (0) / 邑楽社45 (45) / 群馬桜27  
 (0) / 谷山25 (25) / 盛良館24.5 (24.5) / 三龍社  
 24 (24) / 岸19 (0) / 三益社18 (0) / 金星組16 (0)  
 / 三国社18 (0) / 上州10 (10) / 新居8 (0) / 尾崎4.0  
 (4.0)

第8表 前橋市の改良座繰糸の移出入・生産量 (M24～36)

年	移 出			移入	生 産			
	A) 横浜向	B) 国内向	C) 合計		D) 国内から	E) 器械捻造	F) 製造所/ 座繰捻造	G) 自宅/ 座繰捻造
M24	5,008	0	5,008	420	60	3,974	994	5,028
M25	7,584	381	7,965	172	185	3,764	1,142	5,091
M26	6,565	830	7,395	970	191	4,013	626	4,830
M27	*6,653	1,142	*7,795	40	2,362	2,860	133	5,355
M28	*6,773	2,312	*9,085	0	2,362	2,860	278	5,500
M29	2,803	819	3,622	0	2,334	2,802	311	5,447
M30	3,245	1,426	4,671	0	2,693	3,565	417	6,675
M31	2,712	1,570	4,282	0	2,455	2,777	333	5,565
M32	2,750	2,494	5,244	0	173	2,773	4,160	7,106
M33	1,712	978	2,690	0	*55	2,686	2,911	5,652
M34	2,075	1,395	3,470	0	0	3,717	2,322	6,039
M35					32	3,246	1,827	5,105
M36					84	2,131	1,039	3,254

資料) 付表1・2、第5表。  
 移出・移入量のM24は下半期のみ。移入量のM25は下半期のみ。  
 M24～27のFは「各社組/座繰捻造」、Gは「一己人/座繰捻造」。  
 Eは「器械捻造」のこの2群合計(第5表参照)。

すれば、その把握は困難であったろう。石井寛治氏は、前橋生糸全体において「移出入表」の移出量合計と「生糸産額表」の生産量合計との差が減少していくことを示し、そのような解釈をしている<sup>20)</sup>。実際、28年下期についての「移出入表」のコメントには、次のような記述がある。

〔M28下期〕生糸各種とも其出入前期に比すればは非常の増額を見るは、製糸最盛時期に於て糸価昇騰し、製糸家は競て小杵の買入を為し、或は各地より折返し糸を買入れ、捻糸に改造し横浜へ輸出し、又は機業旺盛の爲め内国用の出荷を為したるによる (M29.1.28)

「移出入表」では折返造の移入は28年までゼロとされているのに (後掲第9表)、このような記述がなされるのは、「折返し糸を買入れ捻糸に改造」する商人系会社の買入が前橋の市を経ないものであったからであろう。

また、石井氏が分析した天原社の釜掛の賃挽人の多くは、前橋市近隣の勢多郡 (旧南勢多郡) の村々の零細農であった<sup>21)</sup>。前橋市の生産統計が、正当にも市外の賃挽や小杵買にもとずく改良座繰糸の生産を除外したかも知れない。逆に29年以降のC<Hについては、会社による前橋の市を通さない横浜以外への販売や、横浜での国内商人への販売を想定するべきであろうか。

## 2 従来糸

次に、従来糸について同様の検討をしよう。

個別製糸家が、提造まで製造するか、揚返しないで小杵売するか、という選択を行ったことは、今までのコメントでもたびたび見られるが、さらに次のような「生糸産額表」のコメントがある。

〔34年〕…A輸出高は坐繰捻造は前年に比し意外の多額なれども、他は前年の7分に当れり。B折返し、島田造は同物なり。C故に提糸造りの多なるものを以て折返しの部へ記入し置けり。D提糸造は輸出の際多くは折返しにせざれば購買先にて取引不結果なればなり (M35.3.8、「多なる」に線消しがある)

〔35年〕捻造・折返し造り記入方は前年と同一なり (M36.3.31)

「輸出」という語は出荷の意味でも使われるが、文中に2度使われている「輸出」の語は、横浜向けの生糸の出荷という意味に解すべきものと思われる。下線部Dに関連して生糸の横浜取引に関する報告を確認すると<sup>22)</sup>、全国生糸合計において、提造は明治20年以降急減して32年にほぼゼロになり、島田造は17年以降ほとんどなかった<sup>23)</sup>。福島県出荷を主とする折返造は20年以降むしろ増加傾向にあったが、34年に横浜入荷された群馬県分の折返造は110個 (33年は「掛田折返し」30個) に過ぎなかった。したがって、提造の生糸は、輸出用としては、その多くがいずれかの段階で折返造に改装され、福島折返糸として横浜出荷されたと思われる。ところが、「移出入表」では、横浜向けの「提造」がみられ、急増した33年には2,106個、34年には2,308個とされている (後掲第9表)。いっぽう、「折返造」の移出は国内向けだけである (付表1)。つまり、このような提造を改装した折返造は、「移出入表」では「提造」として扱われていると思われる。

下線部Bは、折返造と同様に輸出用に提造が改装された島田造があるという意味であろう。「生糸産額表」では27～31年と34年に島田造の生産量が記されているが、「移出入表」では島田造は全く登場しない。島田造の形態は提造よりは折返造に近く、横浜市場では折返造として扱われたのであろう。「生糸産額表」の27～31年に見られる「島田造」も、このような提造を改装した生糸と考えられる。



第9表 前橋市の従来糸の移出入・生産量 (M24~34)

単位 個

年	折返造			提 造			従来糸					
	A:折返造 移出	B:折返造 移入	C:折返造・ 島田造生産	a:提造 移出	X:うち 横浜向	b:提造 移入	c:提造 生産	D=A+a; 移出	E=B+b; 移入	F=D-E; 純移出	G=C+c; 生産	H=F-G;純 移出-生産
M24下	0	0	0	6,147	(704)	1,126	5,591	6,147	1,126	5,021	5,591	-570
M25	0	0	0	1,963	(470)	0	1,570	1,963	0	1,963	1,570	393
M26	0	0	0	3,215	(13)	1,365	1,416	3,215	1,365	1,850	1,416	434
M27	240	0	328	2,348	(154)	2,594	850	2,588	2,594	-6	1,178	-1,184
M28	0	0	328	3,989	(279)	3,313	853	3,989	3,313	676	1,181	-505
M29	1,045	1,454	315	3,069	(210)	2,096	850	4,114	3,550	564	1,165	-601
M30	2,947	3,092	343	2,884	(105)	1,750	988	5,831	4,842	989	1,331	-342
M31	3,034	3,512	458	2,987	(58)	1,262	954	6,021	4,774	1,247	1,412	-165
M32	3,549	3,809	605	3,931	(132)	1,663	2,418	7,480	5,472	2,008	3,023	-1,015
M33	0	0	423	6,625	(2,106)	5,869	1,694	6,625	5,869	756	2,117	-1,361
M34	0	0	315	7,173	(2,328)	6,294	1,245	7,173	6,294	879	1,560	-681

資料・注) 付表1・2。M25の移入B,bは下期分。M24のC,c,Gは年間数値。

そして、下線部Cは、このような改装の生糸を、34年の「生糸産額表」では折返造に区分したという意味であろう。ただし、下線部Cの線消しの前の「提糸造りの多なるもの」という表現は、改装しない提造があったことを意味するか、提造改装の折返造が多かったことを意味するであろう。ところが34年の「生糸産額表」では、それ以外の年には必ずあった「提造」生産量がゼロになっていて、「折返造」も少なく、前後にはゼロだった「島田造」が1,245個もある。したがって、この「島田造」1,245個は、「提造」1,245個のミスと思われる。下線部Aにおいて、「輸出高」が「他」にも係るのか、前年の「7分」になったのは何か、もこの点に関わる<sup>24)</sup>。「生糸産額表」に「折返造」と「島田造」が両方とも記されている年は他にない。提造改装の生糸を2つに区分する必要はなかったであろう。

以上を念頭に、従来糸の「移出入表」と「生糸産額表」の数値を第9表にまとめた。ただし、34年の「島田造」の生産は「提造」の生産とみなし、「島田造」と「折返造」は一括した。表を省いたが、「折返造」の移入元は県内北毛・西毛の沼田・吾妻・高崎・安中など、移出先は絹織物産地の桐生・伊勢崎・足利や大間々など。また、「提造」の移入元と横浜以外の出荷先もほぼ同じである。

「折返造」の移出入は29~32年に大きい。移入Bと生産Cの合計が移出Aを上回っている。いっぽう、「提造」では28~31年に移入bと生産cの合計が移出aを下回る。もし、「提造」の横浜向け移出Xが「折返造」の移出に含まれるなら、この2つの差は縮まる。また33・34年には「折返造」の移出入は「提造」の移出入にまとめられていると判断でき、逆に、29年に「折返造」の移出入が「提造」から分けられたのかも知れない。表の右側の「従来糸」は「折返造」と「提造」を一体とみたもので、「純移出」Fと「生産」Gの差Hはほぼ1千個前後である。しかし、Hは全体的にマイナスで、「純移出」より「生産」のが多い。

さて、あらためて、今までの表にある横浜向の移出を第10表にまとめた。前述のように、「提造」は「折返造」に改装された生糸であろう。県内から前橋に入荷され、さらに前橋市でも生産された「提造」は、国内にも多く出荷されたが(第9表)、折返造に改装されて横浜に出

第10表 前橋市の横浜向け生糸移出量 (M24~34)

単位 個

年	器械	改良座繰	提造	合計
M24下	60	5,008	704	5,772
M25	238	7,584	470	8,292
M26	388	6,565	13	6,966
M27	330	*6,653	154	7,137
M28	480	*6,773	279	7,532
M29	560	2,803	210	3,573
M30	519	3,245	105	3,869
M31	140	2,712	58	2,910
M32	210	2,750	132	3,092
M33	53	1,712	2,106	3,871
M34	0	2,075	2,328	4,403

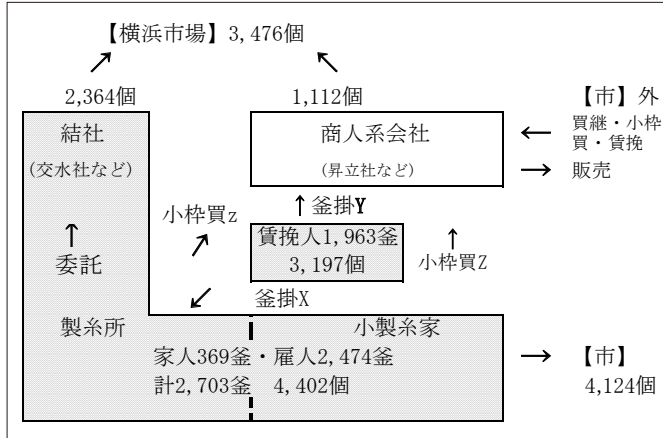
資料) 付表1。



荷された生糸の多くは、前橋市で生産されたものではなかったか。

### 3 「各社組」と「一己人」

#### 第2図 前橋製糸業の構造



「生糸産額表」を区分する群の名である「各社組」「製造所」「一己人」「自宅」は、前橋製糸業の担い手と構造に関わるキーワードでもある。「生糸産額表」においてこれらの名による区分が明治27年と32年に大きく変わっているのは何故か。それを考える前提として、前橋製糸業の担い手や構造につき、確認しておきたい。

研究蓄積を念頭におきつつ、単純化したモデルが第2図である。

矢印は小粋糸を含む生糸の流れであり、35年頃に関する「現況調査」の数字を加えた<sup>25)</sup>。図中の「結社」と「商人系会社」の横浜販売個数は、第7表の販売個数を用いて「現況調査」の前橋市生糸横浜販売個数を比例配分したものであり、また「賃挽人」「家人」「雇人」の釜数と生産個数は、人数＝釜数とし、すべての1釜当りの生産量が等しいと仮定して算出したものである。図中の「製糸所」と「小製糸家」は「賃挽人」を除いた狭義の製糸家であり、「製糸所」は「結社」に加盟していて、「結社」は「製糸所」から委託されたり購入した小粋糸を揚返して横浜販売する。「商人系会社」は「小製糸家」から買った小粋糸と賃挽人に挽かせた小粋糸を揚返して横浜販売するが、さらに買継糸を売買し、前橋市域外からも小粋糸を買い、市域外でも釜掛を行う。また、横浜販売が不振の場合は前橋の市以外で売却することも想定した。「結社」に加盟していない「小製糸家」は、小規模の糸荷を前橋の市で販売するか、小粋糸を「商人系会社」に販売する。以上は、「結社」と「商人系会社」の機能を、また「製糸所」と「小製糸家」の機能を単純化したものである。

この図によれば、「小粋買」Z,zがゼロの場合、「製糸所」「小製糸家」は合わせて2,364個+4,124個=6,488個を生産しなければならないから、これから「家人」「雇人」分4,402個を差引いた2,086個を釜掛で得なくてはならない。小粋買Z,zが多くなれば、その分だけ釜掛xが増える。図の数値では、「賃挽人」の多くは「製糸所」に属していることになる<sup>26)</sup>。もっとも「家人」や「雇人」の1釜当り生産量が「賃挽人」のそれより大きいければ、「製糸所」に属する「賃挽人」の割合は小さくなる。

さて「生糸産額表」の区分の問題に戻ろう。24～26年の「各社組」は第2図の上部の「結社」と「商人系会社」を、「一己人」は「小製糸家」を指すとすれば、この2群による区分は、生糸販売方法の違い、すなわち横浜への大量出荷か、前橋の市での販売か、をも意味すると考えられる。改良横座繰糸の大量斉一性のある糸荷は交水社や商人系会社によって横浜に出荷され、いっぽう、提造を主とする小規模な生糸荷は個々の小さな製糸家によって前橋の市場で販売された。

35年頃の調査である「現況調査」によれば、前橋産生糸の販売方法は、「自宅販売」ゼロ、「市場販売」4,123個（=37,113貫、54%）、「横浜販売」3,476個（31,282貫、46%）であり、「横浜販売」3,476個は「団体」出糸高3,476個と等しい。この「団体」としては交水社・天原社・昇立社の名が揚げられている<sup>27)</sup>。前掲第7表によれば、35年の前橋糸の横浜販売量は2,868個で、そのほとんどをこの3社と勝山で占め、4社合計2,843個は「現況調査」の3,476個の83%に当たる。いっぽう「生糸産額表」による35年6,450個は、「現況調査」による前橋市生糸生産合計の7,599個の86%に当たるから、「現況調査」の数字はやや過大と見て、「団体」はこの4社を意味するとしていだろう。

第8表のAとF、BとGを比べると、24～26年と32～34年については、「各社組」「製造所」の「座繰捻造」が横浜向けに出荷した分であり、「一己人」「自宅」の「座繰捻造」が国内向けに販売された生糸の分と見るのは無理ではない。ただし、24～26年ではA>Fであり、32～34年ではA<Fであり、前述のようにAに含まれる商人系会社の買継などを考慮する必要がある。

#### 4「製造所」と「器械」

第8表によって、あらためて明治27～31年の「生糸産額表」の区分が異質なことが分かる。前述のように、この5年については、改良座繰糸が「器械捻造」と「座繰捻造」に分けて計上されていることは明らかであるが、Gの「自宅」の「座繰捻造」もBの改良座繰糸の国内向け移出よりずっと小さい。生糸生産量を区分する範疇については、生糸種類のほか、①最終的販売主体、②販売先、③生産組織の違いなどが考えられるが、この5年の区分をどのように考えるべきであろうか。

「一己人」と「自宅」はある程度語意の共通性があるが、「各社組」と「製造所」の語意の差異は大きい。「各社組」は交水社や商人系会社など大量斉一性のある生糸荷を横浜に出荷した団体であろう。27年には区分の名は踏襲したものの新区分が採用され、28年に新区分の名として「製造所」が使われた。「製造所」は何を指すのであろうか。

前橋市が作成したと思われる製糸業の「工場」表が28～36年の「勸業年報」に掲載されている。10釜以上の製糸場を器械・座繰の別なく記すもので、商人系会社は含んでいない<sup>28)</sup>。生産量は不記なので、「全国製糸工場調査表」のデータから得た器械・座繰合計の生産量と釜数から1釜当り生産量を求め、これを用いて合計生産量を推計し、第11表とした。33年の「全国製糸工場調査表」第3次「器械之部」の前橋市の生産量はやや過大と思われる<sup>29)</sup>。この表によれば、これら10釜以上の50前後の製糸場の生産量は、28年頃700個前後、32年ごろは1千個前後であろう。この分のほとんどが多くが26年には第8表のFかGに含まれ、27年にはEに移されたとしても、Dの増加分には全く足りない。27年のEがさらに商人系会社の分を含めば説明可能である。商人系会社分の生産量は、第2次によれば3社で1,370個、第7表の28年の横浜販売量は4社合計で1,927個である。

第11表 前橋市の製糸「工場」

年	場数	釜数合計	釜当り貫	生糸生産量
	所	釜	貫/釜	個
A:「全国製糸工場調査表」				
M26	60	1,043	5.2	598
M29	54	807	8.9	797
M33	73	1,112	15.1	1,862
M38	31	732	9.5	769
B:「勸業年報」の製糸業「工場」表				
M28	44	680	8.9	672
M29	34	539	8.9	533
M30	43	735		
M31	16	286		
M32	65	912	15.1	1,530
M33	66	1,020	15.1	1,711
M34	62	986	15.1	1,654
M35	56	989		
M36	52	1,004		

資料) A:第4表、B:「勸業年報」。

注)

A:第1次～4次の「器械之部」「座繰之部」の合計、但し「座繰之部」の合計は昇立社・天原社・勝山分を除く。

第4次の生産量はM37.6～38.5分。

B:「生糸生産量」はAの1釜当り生産量を用いた推計値。

こうして思いつくのは、「全国製糸工場調査表」の作成が区分変更の契機になったのではないかということである。その第1次の結果は、26年に関する数値として28年4月に刊行された。「定期報」にはこの第1次調査のためと思われる報告の控が綴られている<sup>30)</sup>。これに次ぐ同調査の概要は前掲第4表の通りである。第2次における器械・座繰の生産量合計2,168個が、第5表における27～29年の「製造所」の「器械捻造」の数値2,310～2,335個に近い。「全国製糸工場調査表」第2～4次の「座繰之部」には商人系会社の昇立社・天原社・勝山が含まれているが、交水社は含まれていない。これは何故であろうか。「器械之部」には交水社の約60釜の器械製糸場がいつも含まれている。「全国製糸工場調査表」第2～4次に掲載された商人系会社と10釜以上の器械・座繰製糸所の生産量を、「製糸工場」＝「器械」と解し、「製造所」の「器械捻造」としたのではないかと考えられるが、結社・商人系会社と「製糸所」「小製糸家」の関係が十分明らかになっておらず、仮説の域を出ない<sup>31)</sup>。

## 五 おわりに

以上、煩瑣な数値処理が多くなったが、最小限の結論として得たのは以下である。

第一に、「勸業年報」記載の前橋市生糸生産量に関する明治24～36年の統計については、「器械捻造」は器械糸の一部であり、「座繰捻造」は残る少量の器械糸と改良座繰糸全体の合計の生産量と解釈することができる。第二に、同じく24～36年の「提造」「折返造」「島田造」の生産量は、一括して理解すべき数値である。第三に、前橋市の「移出入表」には、商人系会社の買継を含まないなどの流通統計としての不完全さがあり、また時間的差などの生産統計とは異なる流通統計本来の性格を持つことが推測される。第四に、とは言え、「移出入表」は前橋産生糸における直接生産者の経営と、国内市場とりわけ前橋の市の重要性を表すものとして貴重なデータである。

明治20年代のコメントに頻出したように、数多くの製糸家が提造に仕立てて販売するのを止め、小粋糸のまま結社・商人系会社に販売した。そのような選択を行う存在だった彼らは、どんなに零細な規模であれ、独立した経営であった。30年代以降は当然その逆の選択をまず行い、小粋買にもとづく経営は苦境に陥ったであろう。この事が、県外購繭の苦況による釜掛の不振と並んで、商人系会社の30年代における終焉の主因であったように思われる。その場合、「小製糸家」の多くは恐らくは前橋の繭市で県内繭を入手していたと考えられるが、前橋製糸業の原料繭調達の実態という大きな問題がさらに残っている。

### 注

- 1) 石井寛治『日本蚕糸業史分析』(東京大学出版会、1972)。『群馬県史』通史編8(群馬県、1989、同氏執筆部分)。
- 2) 「前橋生糸市場圏」については、井川克彦「居留地貿易と世界市場」(荒野泰典ほか編『近代化する日本』吉川弘文館、2012)。
- 3) 半醒亭閑人権華『前橋繁昌記』(以文会、1891)61～73頁。海野福寿氏は、この文中の上等中の最大の「製糸家」(製糸工女五六十名、釜掛ケの二三百あるもの)を商人系会社の江原芳平らと解しているが、原文は「製糸会社」と「製糸家」を書き分け、上等の「製糸家」の説明の後に「是等製糸家ハ…生糸を会社に出し」とあり、誤読と思われる(『横浜市史』第3巻上、横浜市、1961、500頁、海野執筆分)。
- 4) 『群馬県蚕糸業沿革調査書』生糸之部(群馬県内務部、1903、復刻版『明治前期産業発達史資料』別

- 冊49(1)、明治文献資料刊行会、1969) 146～163、182～198頁。
- 5) 「南三社の発展の主たる要因は、組合員の個別座繰経営の拡大よりも、組数や組合員数の増加に求められるべきであろう」(前掲『群馬県史』239頁、石井寛治執筆分)。
  - 6) 前橋市立図書館蔵。
  - 7) 「勸業年報」は明治26年版のみ「移出入表」の数値を掲載。26年版には「高崎町蚕糸類集散表」もあり、ともに『前橋市史』第5巻(前橋市、1984)に収録(1495～1497頁)。
  - 8) 『前橋市史』第5巻(前橋市、1984)の第215表(1487頁)、第218表(1490～1493頁)。『群馬県史』石井寛治氏執筆分(注1参照)の図25は、この第215表に拠ったものと推測される。
  - 9) 『前橋市史』第4巻(前橋市、1978)695～702頁、同第5巻1416頁。大正1年前橋市の織物生産額23万円に対し生糸生産額1,198万円。
  - 10) 付表を参照されたい。
  - 11) 『群馬県史』資料編18(群馬県、1978)は「農事調」と「勸業年報」明治20～23年版を収録している。
  - 12) このことは37年まで改良座繰糸以外の従来糸の生産が多い勢多・群馬・吾妻郡の数値の突合せによっても確認できる。
  - 13) 第1次～第4次分は『明治前期産業発達史資料』別冊63(1)～(2)(明治文献資料刊行会、1970)に所収。
  - 14) 「勸業年報」の24年の数値は前橋市域以外の東群馬郡分も含み、前橋市分は不記載で一致を確認できない。第3表と第5表とで1だけ異なっている部分があるのは、小数点以下の数値を四捨五入で処理したためである。
  - 15) 「勸業年報」27年版では、前橋以外の他郡でも「提造」以下の従来糸の数量は、南勢多郡の若干量を除いて、「一己人」に記され、「各社組」はゼロ、北甘楽郡・碓氷郡の「座繰捻造」に占める「各社組」の割合は、各100%、96%であり、「各社組」の「器械捻造」が前橋市のように大きい郡はない。
  - 16) 23年9月「桐華新勢豊城共栄山室高間末広清益の八社連帯して」桐華精糸会社が組織され「製糸荷高さ三千個以上」であるという(前掲『前橋繁昌記』71頁)。
  - 17) 「勸業年報」M21～36の生糸生産統計には価額の記載はない。
  - 18) 第3次による諏訪郡器械製糸場の釜当り生産量は11.3貫である。
  - 19) 『群馬県蚕糸業現況調査書』(群馬県内務部、1904、復刻版『明治前期産業発達史資料』別冊49(1)、明治文献資料刊行会、1969)353頁。
  - 20) 前掲『群馬県史』通史編8(石井寛治執筆分)202～203頁。
  - 21) 石井寛治「座繰製糸業の発展過程－日本産業革命の一断面－」(『社会経済史学』第28巻第6号、1963)。
  - 22) 原商店編『横浜生糸貿易十二年間概況』(明治27年刊)、同『横浜生糸貿易概況』(明治29～35年度刊)(いずれも『横浜市史』資料編7、横浜市、1970、所収)。
  - 23) 前掲『横浜市史』資料編7(『横浜生糸貿易概況』)の13頁、817頁。
  - 24) 「生糸産額表」では、「折返造」は34年が33年の74%だが、33年の「島田造」と34年の「提造」はゼロ。「提造」「折返造」「島田造」合計では34年1,560個は33年2,117個の74%に、34年の「島田造」1,245個は33年の「提造」1,694貫の73%に当たる。
  - 25) 「現況調査」325、353、372、414頁。
  - 26) 前掲『前橋繁昌記』61～73頁の「製糸家」の説明では、上等・中等の「製糸家」は自宅に置く「製糸工女」より多数の賃挽人を擁している。
  - 27) 「現況調査」372、389、400～403頁。
  - 28) 例外は「勸業年報」明治29年版で、「精糸昇立合名会社」(釜数不記、職男9・女830人)を掲載している。
  - 29) 注18参照。
  - 30) この報告控のデータは、「座繰之部」の線で消されている2工場分を除いて、「全国製糸工場調査表」第2次と同一である。
  - 31) この仮説に関連した事実が一つある。第6表の横浜の「生糸取引結果」集計の昇立社分597個のうち「昇立社器」とする生糸荷が合計327個あり、市村社分318個のうち「市村社器」が42個ある(残余は座繰)。しかし販売単価は安く器械製糸場製造の器械糸ではないようである。



付表1 「移出入表」(移出)

Mは明治年の略、単位個

仕向先	生糸種類	M24下	M25上	M25下	M26上	M26下	M27上	M27下	M28上	M28下	M29上	M29下
横浜	器械	60	13	225	207	181	120	210	200	280	140	420
	改良座繰	5,008	1,002	6,582	770	5,795	858	*5,795	978	*5,795	483	2,320
	提糸	704	20	450	13	0	75	79	120	159	30	180
伊勢崎	改良座繰	0	0	31	30	3	0	0	0	0	0	0
	提糸	0	0	200	50	0	0	210	335	470	0	515
	生糸	0	0	0	0	0	240	0	0	0	380	0
足利	改良座繰	0	0	125	80	72	155	212	268	360	189	215
	提糸	300	100	230	300	360	230	385	328	585	283	295
桐生	改良座繰	0	0	145	150	330	265	485	398	750	330	0
	提糸	5,000	273	400	405	1,800	392	295	489	525	395	287
	折返	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	325
大間々	改良座繰	0	0	40	0	155	0	0	0	350	35	0
	提糸	0	0	110	0	250	235	325	398	300	357	298
	折返	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	215
其他	改良座繰	0	0	40	0	10	25	0	58	128	50	0
	提糸	143	0	180	0	37	40	82	82	198	79	350
	折返	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	125
総計		11,215	1,408	8,758	2,005	8,993	2,635	8,078	3,654	9,900	2,751	5,545
内訳	器械	60	13	225	207	181	120	210	200	280	140	420
	改良座繰	5,008	1,002	6,963	1,030	6,365	1,303	6,492	1,702	7,383	1,087	2,535
	折返	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,144	1,925
	提糸	6,147	393	1,570	768	2,447	972	1,376	1,752	2,237	0	665
	生糸	0	0	0	0	0	240	0	0	0	380	0

仕向先	生糸種類	M30上	M30下	M31上	M31下	M32上	M32下	M33上	M33下	M34上	M34下
横浜	器械	89	430	93	47	84	126	32	21	0	0
	改良座繰	320	2,925	402	2,310	360	2,390	596	1,116	567	1,508
	提糸	20	85	58	0	53	79	956	1,150	948	1,380
伊勢崎	提糸	450	435	575	231	525	787	375	412	310	497
	折返	0	863	0	584	0	670	0	0	0	0
足利	改良座繰	158	297	282	0	254	381	95	117	93	137
	提糸	258	358	210	237	190	285	450	495	405	594
	折返	0	538	191	475	170	555	0	0	0	0
桐生	改良座繰	310	530	391	0	352	528	132	158	126	190
	提糸	383	250	379	210	342	513	600	720	540	864
	折返	0	828	198	763	143	914	0	0	0	0
大間々	改良座繰	91	0	175	225	159	238	60	72	57	86
	提糸	340	0	320	398	293	439	350	385	333	423
	折返	0	0	210	238	190	485	0	0	0	0
八王子	折返	0	120	0	0	0	0	0	0	0	0
北陸	改良座繰	0	0	0	0	0	0	0	80	75	94
	提糸	0	0	0	0	0	0	75	100	63	127
京阪	改良座繰	0	0	0	0	0	0	0	0	112	157
	提糸	0	0	0	0	0	0	0	0	34	49
其他	改良座繰	40	0	125	372	113	469	120	144	115	153
	提糸	70	235	137	232	124	301	253	304	241	365
	折返	0	598	98	277	89	333	0	0	0	0
総計		2,529	8,492	3,844	6,599	3,441	9,493	4,094	5,274	4,019	6,624
内訳	器械	89	430	93	47	84	126	32	21	0	0
	改良座繰	919	3,752	1,375	2,907	1,238	4,006	1,003	1,687	1,145	2,325
	提糸	1,521	1,363	1,679	1,308	1,527	2,404	3,059	3,566	2,874	4,299
	折返	0	2,947	697	2,337	592	2,957	0	0	0	0

注)

改良座繰：「改良座繰系」「座繰捻造系」「座繰系」「捻糸」。  
各仕向先に欄がない生糸種類は表の上段・下段の期間にわたって不記。

八王子・北陸・京阪：明治24～29年にはなし。

\*：

・M27下の「横浜」向け「改良座繰」の数値は、原資料に910個と記されているが、「定期報」の下記の前橋市に関する記述から誤った数値と思われるので、910個を26年下半期と同じ5,795個とした。

M27下期「蚕糸類集散景況」…七月以降糸況活況好況ナリシ為メ各地製造ノ高ヲ増シ且ツ横浜輸出モ

前年後半期ニ比スレハ稍多キヲ加ヒタリ又伊勢崎足利桐生等機業ノ隆盛ニ伴ヒ需要増加シタルヲ以

テ前年ニ比シ搬出個数ノ超過ヲ見ルニ至ル…

・28下の「横浜」向け「改良座繰」の数値は、原資料に1,750個と記されているが、同じく下記の記述から5千個以上過小と思われる、5,795個とした（第1表を参照）。

M28下期「蚕糸類集散景況」…生糸各種とも其出入前期に比すれば非常の増額を見るは、製糸最盛時期に於て糸価昇騰し製糸家は競て小枠の買入を為し、或は各地より折返し糸を買入れ捻糸に改造し横浜へ輸出し、又は機業旺盛の爲め内国用の出荷を為したるによる（M29.1.28）

M28「前橋市景況」…〔生糸の〕商況は先づ良好の結果を以て本年を終り。〔生糸の〕本年出荷の景況は只海外の需要多きのみならず内地の機業旺盛なるを以て内国用の輸出も亦多きを加ひたり（M29.1.1）。

M29下期「蚕糸類集散景況」…前期より引続き横浜市場糸況甚た不活発なりしが、9月に至り一時騰貴し為め前半季に比し各種共荷数増加せしも漸次にして下落し、随て地廻り者は多かりしが、桐生・足利地方に於て1、2巨商の倒産ありし為め稍や減少の有様なりし。然れども横浜不振の爲め概して運転多き模様なり。



付表2 「移出入表」(移入)

Mは明治年の略、単位個

仕出地	生糸種類	M24下	M25上	M25下	M26上	M26下	M27上	M27下	M28上	M28下	M29上	M29下
高崎	改良座繰	250		72	0	20	0	0	0	0	0	0
	提糸	200		200	50	120	209	375	325	455	283	320
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	302
沼田	提糸	0		135	50	65	125	295	98	185	87	86
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	229
吾妻	改良座繰	130		49	50	350	0	0	0	0	0	0
	提糸	250		400	100	60	430	495	520	675	410	215
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	485
安中	提糸	120		80	15	40	75	85	83	112	60	85
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	148
其他	改良座繰	40		51	0	550	40	0	0	0	0	0
	提糸	556		300	585	280	150	355	325	535	300	250
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	290
総計	ノ	1,546		1,287	850	1,485	1,029	1,605	1,351	1,962	1,140	2,410
内訳	改良座繰	420		172	50	920	40	0	0	0	0	0
	提糸	1,126		1,115	800	565	989	1,605	1,351	1,962	1,140	956
	折返	0		0	0	0	0	0	0	0	0	1,454

仕出地	生糸種類	M30上	M30下	M31上	M31下	M32上	M32下	M33上	M33下	M34上	M34下
高崎	提糸	212	215	128	125	116	150	330	396	314	475
	折返	0	538	211	573	200	650	0	0	0	0
沼田	提糸	55	120	35	39	20	55	290	348	276	477
	折返	0	615	45	597	25	640	0	0	0	0
吾妻	提糸	320	250	178	176	161	322	414	457	393	548
	折返	0	785	220	733	208	812	0	0	0	0
安中	提糸	20	55	33	23	31	46	161	193	153	232
	折返	0	255	0	215	0	257	0	0	0	0
大間々	提糸	0	0	0	0	0	0	920	1,104	736	1,325
其他	提糸	250	253	202	323	185	577	571	685	543	822
	折返	0	899	182	736	167	850	0	0	0	0
総計	ノ	857	3,985	1,234	3,540	1,113	4,359	2,686	3,183	2,415	3,879
内訳	提糸	857	893	576	686	513	1,150	2,686	3,183	2,415	3,879
	折返	0	3,092	658	2,854	600	3,209	0	0	0	0

注) 前表と同じ。